

読売新聞 きょう（2月21日）のイチ押し

1面・スポーツ面・社会面 大坂 全豪V 2年ぶり2度目

オーストラリアのメルボルンで20日に決勝が行われたテニスの全豪オープンで、大坂なおみ選手が2年ぶり2度目の優勝を果たしました。

- ★ 昨年の全米オープンに続き、出場した四大大会は2大会連続制覇で、通算4度目の優勝です。
- ★ 棄権による不戦敗を除き、昨年8月以降、公式戦21連勝となり、世界ランキングは3位から2位に浮上します。
- ★ 新型コロナウイルスの影響で、例年より開催が3週間遅れ、選手らが入国後2週間の外出制限を課せられるなど、異例の環境下で実施された今大会。試合後、大坂選手は、大会を実現させた関係者や観客に向けて感謝の言葉を述べました。

1面・第2社会面 再エネ発電 住民と協議 環境省改正案

太陽光などの再生可能エネルギー発電施設を巡り、景観問題などから住民の反発が相次ぐ現状を受け、環境省は、住民合意を得ながら施設を呼び込む「促進区域」を自治体が設定する新制度を導入します。

- ★ 太陽光発電施設については全国で100以上の自治体が設置を規制する条例を制定しています。
- ★ 環境省は地球温暖化対策推進法の改正案を通常国会に提出予定で、早ければ2022年度にも新制度をスタートさせたい考えです。

他紙と比べて

真偽不明の言説があふれる SNS 空間のあやうい実像にせまる、シリーズ企画「虚実のはざま」。本日朝刊の社会面では、「闇の政府が世界を操っている」という根拠のない米国発の陰謀論を多くの人が信じてしまうのはなぜか、に迫りました。一時、陰謀論にひかれ、そこから「抜け出した」という映画監督の増山麗奈さん、俳優の高知東生（たかち・のぼる）さんが、それぞれの体験を赤裸々に語っています。